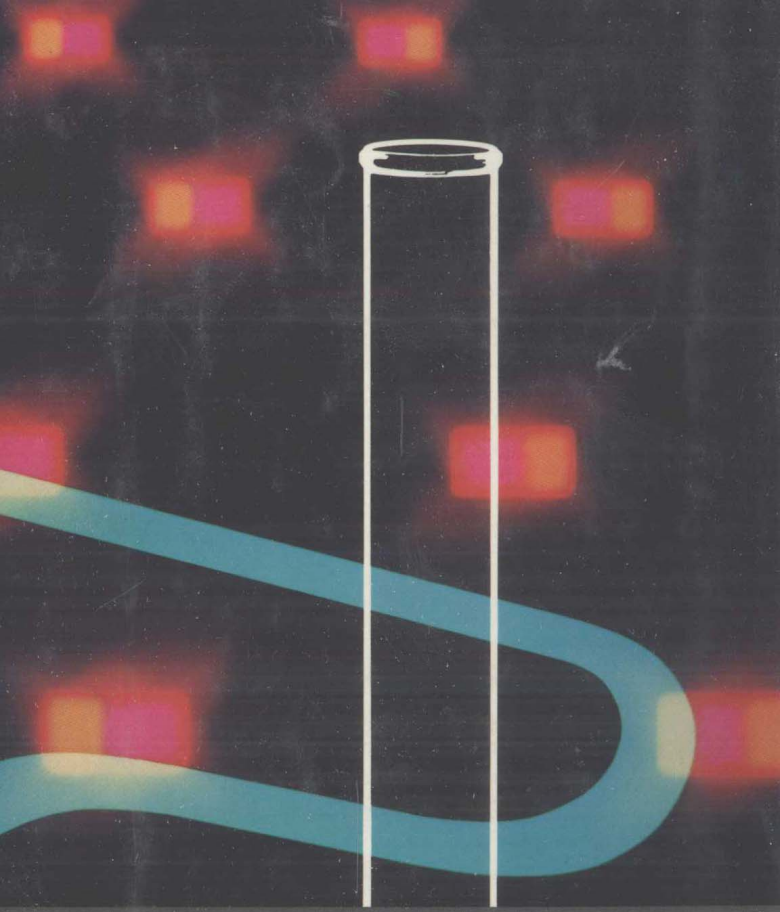

KAPPA NOVELS

長編推理小説　書下ろし

迷宮捜査官

島田一男

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　迷宮捜査官

昭和52年1月25日　初版1刷発行
昭和57年12月10日　23刷発行

定価650円

著者　島田一男

発行者　大坪昌夫
印刷者　盛照雄
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替　東京6-115347
株式会社光文社
電話　東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(関川製本)
表紙の模様・意匠登録　116613
© Kazuo Simada 1977

(分)0-2-93(製)02308(出)2271 (0)
Printed in Japan

長編推理小説・書下ろし

迷宮捜査官

島田一男

カッパ・ノベルス

目次

暗い雨の記録　5
街を流れる唄　21
焼けた鍋の中　52
風雨に散る　72
一枚の枯れ葉　105
白鳥は語らず　126
秋風に乗る凶運　149
子は誰のもの　169
ただ一人のために　192
解説　天野龍　213

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

イラストレーション　進藤信一（しんどうしんいち）

第一章　暗い雨の記録

1

雨が降っていた。

さすがに東京の街は広く、下町で降っても山の手は晴れていることがある。もちろん、その反対の場合もあるが、この日の雨雲は、すっぽり東京中を包んでいた。

谷中の青蓮院のカワラは雨に鈍く光っていたし、本堂の前や、裏の墓地には小さな水溜まりが出来ていた。

「よく降りやがる。選りに選って、こんな日に納骨なんて……」

石屋の定吉は、墓地の入口にある大きな無花果の葉かげで雨を避けながら、これからの仕事を考えて、うんざりした。

無花果は大きく南へ枝を張っていたが、その真下に、古めかしい井桁を組んだ掘抜き井戸がある。何年か前に井戸替えをしたとき、十五、六個の頭蓋骨と腕や脚の骨がゴロゴロと出て来た。

警察で調べた結果、いずれも明治以前のものであることがわかった。どうやら、何代か前の住職が、行き倒れかなにか、引取り手のない死体の埋葬を命ぜられ、無縁墓に埋めもせず、この井戸へ投げ込んだものらしいということになり、問題にはならなかったが、それまで、毎年夏の終わり頃、この無花果の実をむしり取って食うのを楽しみにしていた定吉は、口の中に苦っぽい唾がたまったのを、いまだに忘れることが出来ない。

当然のことだが、それ以来定吉は無花果の実を食っていない。実は年毎に枝についたまま赤く鉢割れ、烏や雀につつかれ、果てはポトリッと地面や井戸の中へ落ちる。水に沈んだのはまだよいが、地面へ叩きつけられた実には、蟻がまっ黒に集まって気味が悪い。

定吉はいまいましげに枝を見上げた。人間が手を拡げた形に似ている葉はよく繁り、雨水が葉末から水玉になって、ひっきりなしに落ちている。

「この無花果のやつは、大勢の人間を投げ込んだ井戸の

水を吸って大きくなりやがったのだ」
定吉は舌打ちをすると、きびすを返して、雨の中を本堂の方へ向かった。
まだ正午を過ぎたばかりであった。納骨のために施主やその親類たちが集まるのは三時と聞いている。時間はたっぷりあるわけだ。
「おや、もう済んだのかい？　早かったじゃないか」
庫裡の炉端で居眠りをしていた寺の大黒さんが物憂げに振り返った。
定吉は親の代から青蓮院に出入りしているが、大黒さんの名前は知らない。和尚は婆アさんと呼んでいるし、死んだ先代の石定は寺の奥さんといっていた。わかっているのは、大黒さんは吉原の女郎あがりで、年季が明けると寺へ押しかけて来て居坐ってしまったということだけである。若い頃の和尚はなかなかの色男で、こっそり吉原へ通い、だいぶもてたらしい。大黒さんは、その頃の馴染みのひとりだったのであろう。
「いいえ。仕事はまだなんで……」
定吉は上がり框に腰を降ろした。仕事着のズボンが濡れていて、尻の辺りがひやりとした。
「お酒だろ？　駄目だよ」
「とんでもない。まだお施主さんがみえるまで間があるので、もう少し小降りになってからと思いましてね」
「時間があっても飲まさないよ」
「おねだりしてるんじゃありませんよ」
「とにかく、納骨ンときに、お前さんが赤い顔してたんじゃサマにならねえし、方丈さんもバツが悪いやね」
お寺の奥さんにしてはひどい言葉遣いだった。三十年近くたち、腰が曲がっても吉原時代の伝法さは抜けていない。
それでも大黒さんは、茶釜からお湯をくみ、定吉に熱いお茶をいれてくれた。
いまどき東京の寺で、囲炉裏が切ってあったり、茶釜を使っていたりするのは珍しいことだが、それもこの寺が戦災を受けなかったためと、和尚が凄くケチで、寺の改装などに金を出したがらないためであった。
「きょうはだいじな檀家さんだからね、いまは飲まさないよ」
「わかってますよ。あのお墓は三年前に青木の大奥さまがなくなったときに、大旦那の注文であっしがこしらえ

たのですからねえ」
「百万円からかかったお墓だったね」
「なにしろ赤御影で、竿石の高さが四尺五寸、台が三段。墓所の敷地一間半四方をやはり赤御影の玉垣で囲んで、中に本那智黒の玉石を敷き詰めたんですからねえ。あたしも長年石屋をしてますが、あんな立派なのをこしらえたのは始めてですよ。だけど、あの敷地ではお寺のほうもタンマリ……」
「だろうね。幾らで売ったのか、聞かせて貰わなかったからお金の高は知らないけど、方丈さんが雨に濡れた泥恵比須みたいな顔をしていたから、相当なものだったのだろうね」
「その青木の大旦那がたったひと晩でぽっくり亡くなって、きょうが納骨。わからんもんですねえ。人間がこうももろいものとなると、生きているうちに好きなことをしておいたほうが得ですよね」
「催促したって、お酒は出してあげねえよ」
「いいえ。あたしはいま、ふっと仲のことを考えたんですがね」
「あー、やっぱり居所はわからないのかい？」
「別に探してもいないんですがね、三年前にあの墓をこしらえた時には真面目に手伝ってやがったんですが、急に学問がしてえなんていい出しやがって……」
「あの時は高等学校だったっけ？」
「卒業したてで。石屋はやりたかアねえってえと、ぷいっと家を出て行っちまいやがった。いま頃、どこで何をしてやがるんだか……」
「なあに、そのうちに帰って来るわさ」
大黒さんは、どっこいしょ……と声を掛けて立ち上がると、戸棚をガタガタいわせ、湯呑みに冷や酒を注いで、上がり框に置いた。
「一杯ひっかけてお行きよ」
「済んません。仕事を済ませてからゴチになります」
「まだ降ってるよ。濡れてカゼをひくといけないからさ」
「仕事といっても大したことじゃありませんから」
「いいんだよう。話がしめっぽくなっちまった。飲まさないといったあたしがすすめるんだからさあ。方丈さんには内証だよ」
「そうですか……。じゃ……」
定吉は、湯呑みの酒を一気に呑みほすと、それをシオ

に立ち上がった。
雨はいくらか小降りになっていた。
昼飯を食っていなかったせいか、胃袋にしみた冷や酒が勢いよく手足の先まで拡がって行くようだ。
青木家の墓は広い墓地の東側にあった。西方極楽浄土に向かって建つという意味では、確かに一等地ということが出来るだろう。
寺歴の古い寺である。辺りには苔むした五輪形の大名墓や歴代住職の黒ずんだ卵塔墓など立派なものもかなりあったが、大きさといい、直線を組み合わせた形といい、朱色がかった色彩といい、青木家の墓は群を抜いていた。
敷き詰めた那智黒の玉石が雨に洗われて、一段と黒さを増している。
定吉はしばらくの間、惚れぼれとした眼で竿石を見上げていたが、ふっと墓石のうしろへ目をやると、チッと小さく舌打ちをした。
墓地は万年塀で囲まれているのだが、ところどころ崩れたり、大きな穴があいていて、表の通りが見えている。
万年塀とはいえ、十五年もすると風化して崩れやすくなる。ブロック塀よりは遙かに弱いのだ。
「——方丈さんは渋いや。なんだかだと檀家から銭を集めているくせに……」
定吉はちらっと本堂の方を眺めてから青木家の墓へ近づいた。
三段の台石の正面には線香立ての重い切り石が嵌め込みになっている。この線香立てをはずすと地下の納骨室へ出入りすることが出来る。地下室は上下、四方をコンクリートで固め、地震で崩れたり、地下水が流れ込んだりしないようにしてある。
これも定吉が仕上げたのだ。これだけの広さがあると、今後、青木家の三代から四代にわたっての納骨は楽に出来るはずであるが、いまのところ、先代の夫人の骨壺が一つ、淋しく納められている。
定吉は用意して来た小ぶりのテントを張った。これで納骨室の口をあけても水は入らないし、施主や和尚も濡れずに済む。
次に定吉は注意深く線香立てを動かした。うっかり切り石の角を欠いては大変である。
「——へい、大奥さま。きょうから大旦那さまとご一緒に——」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

穴の中をのぞいた定吉が、ぎょっと言葉を呑んだ。

2

きょうも雨だった。

だが、傘がいるほどではなかった。雨というより、霧といったほうがよいかもしれない。八月の熱気の中では、濡れるより乾くほうが早いくらいである。

警視庁捜査一課継続捜査班主任の湯浅警部は、霧雨の中、歩き馴れたお濠端の道を九段の方へ辿っていた。

これが湯浅の昼休みの運動なのである。

長い間一課の第五係主任であった湯浅は、殺人事件の現場へ飛んだり、捜査本部を指揮したり、ときには自ら聞き込みや地取りに出かけたり、オーバーワークと考えるほど体を動かしていた。それが継続捜査班を担当してからは、ほとんど一日中、警視庁旧館五階の一室でデスクにへばりついている。

――これじゃ体がなまっちまわア……。

かくて湯浅の食後の運動が始まったのである。

運動のコースはいろいろあった。警視庁がある桜田門前から祝田橋へ出て、皇居外苑の内堀通りを大手門から清麿の銅像まで行って引き返す。また地裁前から日比谷へ出て右折し、新橋から虎の門をひと回りして帰る。時には、桜田濠、半蔵濠からイギリス大使館前を通って千鳥ガ淵へ出る。

どのコースも同じような距離で、食後の散歩には手頃だが、千鳥ガ淵へ出ると、つい、目と鼻の先にある科学捜査研究所へ足が向いてしまう。

科捜研は警察庁の外局で、警視庁とは直接のつながりはないが、そこにいる特別捜査部次長の円城寺警部を始め、特捜部の科学者たちとは、幾度かの事件を通じて親しい仲であった。

「――よう、雨の中をわざわざ……。本日は、何ごとかね」

科捜研の食堂へ湯浅が入って行くと、忽ち明るい声が飛んで来た。――窓ぎわのテーブルで食後のコーヒーを楽しんでいた円城寺が笑顔で手をあげていた。

同じテーブルに復顔班の浜松技官、毛髪班の徳丸技官がいた。浜松は頭蓋骨の肉付け、徳丸は毛髪からの血液型判定で、世界的に知られた法医学者だ。

また、科捜研の科学者群では紅一点の牧村香那子技官も笑顔を湯浅へ向けている。香那子は心理班——嘘発見器を扱わせると、まず第一人者ということが出来よう。

「別に……。目的があって、やって来たわけじゃあねえよ」

湯浅が円城寺の横に腰を降ろすと、香那子が立ってカウンターの方へ行った。湯浅のためにコーヒーを取りに行ってくれたのであろう。この食堂は一応セルフサービスが建て前になっている。

「しかし、顔色が冴えんねえ。やっぱり第一線から遠ざかると運動不足で、体の調子が狂うんと違うかね」

浜松が、本当に心配そうにいった。

「冗談じゃねえ。あたしはまだ第一線にいる積もりですよ」

「あ——、ご免ごめん。あんたの持論によると、継続捜査班は絶対に姥捨て山ではない。そうじゃったねえ」

「勿論ですよ。うちの班に来ている連中は、警視庁四万四千の警察官の中から選ばれたベテランばかりですよ」

だがしかし、警視庁の職員たちは、そうは見ていない。殺人事件、あるいは爆発事件、連続放火魔など特殊な事件が発生すると、所轄署に特別捜査本部が設置される。捜査本部は、形式的には刑事部長を長とし、捜査一課長、所轄警察署長の指揮下に置かれるが、実際に捜査の指揮をとるのは捜査一課の主任警部である。

捜査本部は原則として、捜査一課の一個班と、それと同人数の所轄署の捜査員とで構成される。一課から八人乃至十人の刑事が来れば、署からも同じ人員を出さねばならない。それも、一課側が部長刑事六人に平刑事四人なれば、署側は部長刑事四人に平刑事六人。そして部長刑事と平刑事でひと組となり、捜査は必ず二人で行なわねばならないことになっている。

これは、犯人を逃がさないためと、単独捜査の危険を防ぐためなのである。

ところが、往々にして一年、二年と捜査を続けても真犯人を挙げることが出来ない場合がある。——いや、往往にしてどころではない。犯罪者の検挙率では、日本は世界の最高レベルを誇っているが、それでも全国で年間平均六十件近い殺人事件が未解決という数字を示している。警視庁でも毎年三件や四件は未解決で年を越している。

従来は、事件の性質にもよるが、一年から三年もたつと、いわゆる迷宮入りで捜査本部を解散したものである。そうしなければ、あとからあとからと発生する凶悪事件に捜査員を振り向けることが出来ないからなのだ。

——もう少し人手があったら、捜査を続けることが出来ただろうに……。

未解決解散の度に、本部員だった刑事たちは人知れず涙を呑んだことであろう。

事実、未解決で本部解散は捜査当局にとって決して名誉なことではない。——何らかの方法で犯人を追い続けたい……。これは最高幹部以下本部員全員の一致した気持ちなのだ。そこに継続捜査班設置の発想があった。

かつて、少年を誘拐し、身代金を奪ったうえ殺害するという凶悪な事件があった。この事件は二年半という歳月をかけて遂に犯人を逮捕したが、その捜査は難航を極め、二年目には捜査本部を解散、FBI方式に切り替えられることになった。

徹底した科学捜査と少数精鋭主義……。これがFBI方式の特徴である。この誘拐殺人事件のときは本部員であった四人の部長刑事が、本部解散後も捜査に専従し、犯人がくたばるか、こちらが死ぬか、とことんまで追い続けるぞと執念を燃やし、とうとう犯人を挙げたのであるが、これが継続捜査班の芽ばえということが出来よう。

継続捜査班の歴史は浅い。誕生してまだ二年余りだ。その初代の班長に、一課第五係の主任であった湯浅警部が任命されたのである。

——凶悪事件は絶対に迷宮入りさせないぞ……。

警視庁では、そんな意気ごみで、捜査本部打揚げ後も継続捜査へ切り替え、FBI方式にならって本部で活躍した四人の部長刑事が一件書類や証拠品を抱えて、湯浅の指揮下へ入って来る。

湯浅の考えでは、選ばれた〝四人の侍〟なのであるが、——迷宮班入り……とささやく声がないでもない。また、継続捜査専従を命ぜられた本部員は、——とうとうおれも姥捨て山行きか……と内心がっかりするものがあるのは当然だ。

考えてみれば、殺人事件の時効は十五年だ。一方、捜査を担当するデカ長は概ね年を食っているものが多い。警察官には定年はない。しかし、慣習によって、満五十七歳の三月末日になると、後進に道をひらくという名目

で勇退することになっている。
仮に四十五を過ぎて継続捜査班入りすると、担当事件が時効にならないうちに退官しなければならなくなる。犯人とおれと、どちらが先にくたばるか……と、いっていても、定員制に縛られている組織体の現実は厳しい。〝迷宮班〟入りで気が滅入ってしまうのも、止むを得ない人間の弱さであろう。
「あら、今日は元気がないわねえ」
コーヒーを持って戻って来た香那子も、湯浅の顔をのぞきこんだ。
「そんなことはねえですよ」
湯浅の言葉としては丁寧なほうだ。——湯浅は警部である。香那子は同じ警部の円城寺が次長をしている科捜研特捜部の一技官に過ぎない。だから、もっと雑な言葉を使ってもよいはずなのだが、——技官……というのがちょっと変わった存在なのである。復顔の浜松はT大医学部の、毛髪の徳丸はJ医大の助教授である。香那子にしても医学博士で、女子医大の非常勤講師であった。
円城寺は、T大法学部出のエリート警官で、まだ三十代だが、湯浅は高校出で、捜査畑一本で叩きあげた四十男……。やはり法医学者の技官たちには遠慮があった。
「いや、本当にきょうは元気がないな」
円城寺が、コーヒーのカップを取りあげた。
「仕事が面白くないんじゃないのかい？」
「そんなことはねえよ。あたしゃいまの仕事に生き甲斐らしいものを感じてる」
円城寺に対しては、湯浅もザックバランな喋り方をした。
「じゃ、その仕事が思うように進まないので滅入ってるんじゃないのかい？」
「あせったってしようがねえさ。もともと一年半も二年も捜査本部でやって、どうにもケリがつかねえから継続捜査へ切り替えた事件ばかり背負い込むのがあたしの班だ。じっくり腰を据えてかからなきゃアいけねえ……と最初から覚悟してるんだがね。あたしもやっぱり弱え人間さ。ちーっとキザかな、こんな言葉は」
確かに、柔道三段、肩幅が広く、ガニ股でがっちりした体、意志の強そうな口と目を持った湯浅にしては似合わしからぬ言葉だった。
「貴公、いま、幾つ事件を抱えているんだね？」

小柄で、しわの多い、南京豆のような顔をした徳丸が、湯浅の顔をのぞきこむようにしてたずねた。
「昨日から四件になりましたよ」
「みんな殺しかね？」
「ええ」
湯浅が幾度かうなずいた。
「四谷の宝石商殺し……。あれは未解決だったな」
円城寺がたずねた。
「まだだ。おれんとこの一番重いお荷物さ。本部と合わせて六年近いがね。も一つ古いのが三年を越した品川のマンションの若妻殺しだよ」
「その事件には小生が噛んだ」
毛髪班の徳丸が乗り出すようにしていった。
「東品川の現場から男の体毛が発見され、小生が鑑定した結果、血液型や年齢、その他ある程度の職業判別は出したのだが……」
「その記録も有力な捜査資料として長サンたちは参考にしているんですが、真犯人が浮かんで来ねえんですよ」
「それから？」
香那子がたずねた。
「東京湾に浮かんだ女の片脚事件でさあ。二年前の……」
「あー、あの捜査にはわしも一枚噛んどるよ。硬組織学の立場から、わしゃあの片脚から被害者の骨格や身長の測定をやったから……」
湯浅は、溜息混じりに四人を見回した。
「四人ずつの長サンたちはみんな、一生懸命にやっているんですがね。宝石商事件担当の山村部長と若妻殺しの春日部長の二人は五十六なんですよ」
「来年の三月いっぱいで勇退ってわけね」
香那子の声には同情の気持ちが現われていた。
「それに、昨日から継続捜査に切り替えられた青蓮院事件の外野村部長も五十五なんでねえ」
「あら、あの事件もう本部は打ち揚げたの？」
「もう……といっても、墓場の中で素っ裸の女の死体が発見されたのは去年の五月ですからね、一年余りもたっているんです。もう一つ、捜査本部が置かれた上野署は、東京でも新宿署と並ぶ凶悪犯罪多発地帯を管内に持っている。本部を二つも三つも抱えちゃ、コソ泥を追っかける人手もなくなりますからねえ」
「それにあの事件は刑事泣かせだったようね。被害者が

クラブのホステスだったとかで……」
「ええ。新宿のね。銀座や赤坂に比べて、新宿、上野、浅草のホステスは流動的でねえ、男性関係も不特定多数。やり難いんですよ」
湯浅は、もう一度溜息をつくと同じ警部の円城寺の方を見た。
「上野の本部から回って来た長サンたち、苦労することだろうな。それを思うときょうの天気みてえな気になるのさ……」

3

——外野村巡査部長　上野署　五十五歳
——原巡査部長　捜査一課　四十六歳
——守田巡査部長　捜査一課　四十四歳
——八木巡査部長　上野署　三十二歳

これが、継続捜査班入りした青蓮院事件専従の捜査員四人である。
湯浅が科捜研から警視庁五階の部屋へ戻ったとき、四人のデカ長はこれからの捜査方針を話し合っているところだった。
他の三つの事件の捜査員は全員出払っていた。——うっとうしい霧雨の中を、コツコツと歩き続けていることであろう。その歩みは明日も明後日も、二年も三年も続くかもしれないのだ。
「聞こうか……」
湯浅は、行儀の悪い恰好で自分の椅子に腰を降ろすと、四人を見回した。
「大体のことは承知しているが、この一年余り、捜査に体当たりして来た長サンたちから詳しいことを聞きたいんだ」
「去年の五月十二日のことでした——」
「屍体発見当時のことは結構だ」
一同を代表して、最年長の外野村部長が話し始めたのを、湯浅が片手をあげて止めた。
「なんとかって石屋がどっかの墓をあけると、地下の唐櫃の中に女の全裸死体が投げ込んであった。そうだな」
「ええ。発見者は石屋の定吉。墓の持ち主は青木という家で、当主は正彦というのですが、その日、死んだ親父さんの遺骨を納めることになっていたんです」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor